

## ていばーく展示場紹介①

### 近代以前の通信 コーナー「わが国の通信制度の発達」 ～近世の通信～

江戸時代になると世の中も安定して商業が盛んになり、手紙のやりとりがますます多くなったため、手紙を運ぶ制度として飛脚が発達しました。

飛脚には、継飛脚、大名飛脚、町飛脚などの種類があります。

継飛脚は江戸幕府の文書を運んだ飛脚のことで、通常2人1組になって、街道を宿場から宿場へとリレーのように引き継ぎながら運びました。

大名飛脚は、大名が江戸と地元との連絡をするために利用した飛脚で、紀伊や尾張の飛脚が有名です。この大名飛脚は、街道の七里（約28km）ごとに引き継ぎをする小屋を置いたので、七里飛脚とも呼ばれていました。

町飛脚は一般に人々が利用した飛脚のことです。江戸、京都、大坂の商人たちが幕府の許可を得て、東海道を利用した飛脚屋を営業しました。（定飛脚ともいう。）この飛脚は、ひと月に3回、3つの都市の間を往復して手紙を運んだので三度飛脚と呼ばれました。また江戸時代の末には、江戸の狭い範囲内だけで営業していた町飛脚も現れ、担ぎ棒に鈴を付けていたことから「チリンチリンの町飛脚」という愛称で町人に親しまれていました。



展示場風景



「富士百撰 下三十七 暁の不二」  
葛飾北斎筆 模刻彩色  
（夜明け時、富士山を背に状箱を担いで走る継飛脚の様子。早く走るため上半身は裸で運送していました。）



「日本交通図絵稿本 定飛脚の図」  
尾形月耕筆  
（馬に乗っているのが町飛脚の幸領）



「江戸名所寿留賀町」  
初代広重筆  
（画面左で箱を肩に担ぎ立ち話をしている2人が町飛脚）

## 学芸員雑記帳

## 「近代郵便の創業」

明治4年1月24日（太陽暦では1871年3月14日）に、郵便創業の太政官布告が発せられ、同年3月1日（太陽暦では4月20日）新式郵便がスタートしました。この制度により、日本最初の切手「竜文切手」4種の発行と、郵便物を差出すための箱である「書状集箱」（郵便ポスト）の設置が行われました。東京では四日市郵便役所（現日本橋郵便局の場所）のほか11箇所、京都では4箇所、大阪では7箇所に、また、東海道の各駅には、上り用・下り用の2個ずつが設置されました。切手の販売をする切手売りさばき所も設置されました。また、郵便業務の機関として、郵便業務全体を統括する駅通司があり、その下に、現業機関として東京・京都・大阪の3都市に郵便役所が、東海道の宿場には62カ所の郵便取扱所が設置されました。こうして、従来の飛脚から、国営の近代郵便制度が創業しました。この創業にあたっての最大の功績者は前島密であり、新しい事業を軌道に乗せたのが、初代駅通権正の杉浦讓の功労によるものです。（井上恵子）



郵便創業当時の郵便役所（左側の建物）  
（中央門内は駅通司、徳川幕府の魚類御用屋敷を改築したものです。）



日本最初のポスト  
（左側は京都・大阪市内用。右側は街道筋用。）



日本最初の切手  
「竜文切手」4種